

10月13日 歌は世につれ

「歌は世につれ」という言葉がある。歌は流行した時代の世情を表しているという意味だが、若い頃はその意味が全くわからなかった。それもそのはず。年齢をある程度重ねないとその感慨は理解できない。

先日、娘の仕事場でりんごの差し入れがあったそうで、年配の、娘いわく「おじいさん」が、「りんごといえば」と、ある歌を歌い出したそう。初めて聞いたその歌の感想を「軍歌みたいやった」と娘は言う。「パパやったら知ってるやろう」（人を老人扱いして...）と、尋ねるので「りんごの花ほころびってやつか？それともりんご～」と唸りだすと「違う。もっと軍歌みたいな...」。結局ユーチューブで調べ、「りんごのひとりごと」という歌であると判明した。

りんごにまつわる歌だけでもかなりの種類がある。世代によって、各人の歴史によって、とらえ方も様々だ。人生の節目節目に歌があり、歌とともに思い出がある。

私自身、歌に救われたこともある。挫折して未来を見失ったとき、私を救ったのは岡林信康の『今日をこえて』。母を亡くしたとき、私を癒やしたのは、スターダストレビューの『木蓮の涙』。最近元気をもらっているのは鬚ダンの『Laughter』。音楽もいい、歌詞もいい。私にとってはどの歌も色褪せない「今」の歌だ。

